第五章　近代出石の教育と文化

この章のあらまし

この章では、明治維新から太平洋戦争終結時までの出石の教育と文化について叙述した。

第一節の学校教育の進展と変遷では、一八七二年（明治五）の学制頒布から一九四五年（昭和二〇）の終戦までに限って記述し、それ以前の明治維新期については第一章に、戦後については第七・第八章にゆずった。

全国規模の画一化した我が国の近代教育制度下での展開であるから特に目だった変異はないものの、初頭においては新制度に対応しうる基盤の差から各校ごとに若干の差異があった。

藩校弘道館からの移行が可能であった「出石小学校」（のちの弘道小学校）は規模や内容からも他校より優位に立ち、その後の進展や変遷でもつねに中核的立場を持続した。ために記述もこれを中心に他の町内各校の沿革誌を参考にして、特徴あるものを通観することにした。また、義務教育以外では、現在の「県立出石高等学校」の前身である「町立女子技芸学校」からの変遷経緯や「幼稚園」・「青年学校」などについて略述した。

◇　◇

明治維新の廃藩による失職に加え、一八七六年の出石町大火も手伝って郷里を離れる者も多く、青雲の志を抱いて中央に進出して活躍する出石人が目だった。政治・経済面では薩・長を中心とした藩閥勢力が強かったこともあって、進出分野は学問・教育・芸術などの文化面にその業績が顕著に認められる。

東京帝国大学の初代総理・総長の加藤弘之、地理局長・神社局長などを歴任した桜井勉、明治女学校や小諸義塾を創立して島崎藤村から「われらの父」と仰がれた木村熊二、『女学雑誌』の発刊をはじめ明治女子教育の先駆者として知られる巌本善治、森林植物学の先覚田中壌、明治中期の美術界で活躍した松井昇と小坂象堂、歌曲の訳詩家近藤朔風などがその人たちである。

これら東京進出の人々は、一八七五年（明治八）ごろには「出石会」をつくり、間もなく発展して「但馬会」を結成した。この会は、在郷会員をも含めて知識の研磨と徳行の修養を目ざして連繋した。明治中期には但馬会々員数は一二〇余名に達し、そのうち出石出身者が半分近くを占めていた。

◇　　◇

在地の顕著な文化活動では、明治後半の『出石雑誌』・『但馬雑誌』の発刊がある。共に出石で刊行され、すぐれた内容でその評価は高かった。

在来の出石焼は、生糸と共に新時代に対応する出石の主要物産と目され、新風が吹き込まれて改良が進んだ。ことに一八七六年（明治九）に設立された盈進社と一八九九年（明治三二）に設置された試験場の業績が特筆される。生糸の生産輸出は早くに成功した一時期があり、出石磁器の輸出も明治全期を通じて志向された。

盈進社設立翌年の一八七七年（明治一〇）におけるパリ万国博覧会出品はその動向の最初で、当時の『盈進社絵図』には欧風化した形態や、フランスのセーブル磁器の模様まで取り込まれている。また、明治後期の試験場活動時代にもパリやセントルイスの万国博覧会に出品し、金賞を受けるなどの活躍と輸出への志向努力が認められる。しかし、輸送の問題や高級志向のコスト高などもあって輸出の実現には至らなかった。

◇　　◇

近代の出石を全国的に有名したのは鶴山である。明治中期から続いたコウノトリの営巣は、国内唯一のもので、国の特別天然記念物指定を受けた。最盛期には桜尾の鶴山を中心にその数も六・七〇羽を数え、営巣地には茶店も出て賑わったが、敗戦と共に四散して消滅する命運をたどった。

第一節　学校教育の進展と変遷

学制の公布と新小学校の設立

一八七二年（明治五）八月三日、我が国最初の近代的教育制度法令である『学制』が頒布された。それは「邑（むら）に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」ことを期したもので、全国を八大学区に分け、それを中・小学区に細分し、それぞれに大・中・小学校を設けて国民皆学を期したものである。政府はいわゆる「被仰出書」を前日の八月二日に公布して、学制の理念を宣明にしているが、それは国民に不学の者なく、個人各自が身を立て業を起こすために修学するもので、その教育は機会均等であるとしている。

小学区はおよそ人口六〇〇人を基準として設定され、それぞれに一つの小学校を建てるとし、小学教育を義務制とするが、原則として経費は支弁しない。修学は個人の幸福のためで、学校は人民独立で設立し維持するというものであり、小学区は学齢児童を収容する小学校を設立する義務を生じたが、一般にその実現は至難であった。そのための町村費、戸別・地租割などの学費賦課、借入金や寄付、父兄の授業料負担（五〇銭を基準とする）は過重で、維新後間もないこの時期にその大事業を一挙に成し遂げることはできなかった。

学制によれば、全国を八大学区（翌一八七三年〔明治六〕七大学区に変更）に、一大学区を三二中学区、一中学

区を二一〇小学区に分割したが、兵庫県は京都・大阪府などと共に第三大学区に属し、但馬はその第二四番中学区となった。この計画によれば、義務教育の小学校だけでも全国に約五万校を設立しようとするものであり、容易に進まなかった。兵庫県では、学制後四年の一八七六年（明治九）現在で、開設小学校数は八〇七校にはなったが、その多くは寺小屋に小学校の門標だけを掲げた程度であったという（『兵庫県教育史』）。また、明治一〇年代の県下小学校の児童就学率は四〇パーセント前後にすぎなかった。

このような状況のなかで、出石の弘道校区の場合は恵まれていた。第一章第二節で詳述したように出石藩は、藩校弘道館のほか学制頒布前の一八七〇年（明治三）一月には上・下の女学校を、一二月には城下に市校二と出石郡ほかに郷校を開設するなど教育には格別に進んだ藩の対応がみられた。当時は一般に旧藩時代の藩校は閉校されていく時期であった。出石では学制に基づき、翌一八七三年（明治六）三月一七日に小学校を組織して、旧出石藩の弘道館を校舎にあて「出石小学校」と称した。同年にこの小学校運営のため、旧藩主仙石久利の養子政固が一〇〇円、加藤弘之が五〇円、金沢誠外三九人が一一一円八〇銭、小野組一〇〇円の寄付があった（『弘道小学校沿革誌』）。一八七七年（明治一〇）には東京大学初代総理の要職に就任する加藤弘之ではあるが、蕃書和解御用助教時代に五〇円の寄付は高額で、郷党後進に対する教育への熱意が感じられる。

学制に対する旧町以外の村部の小学校開設の状況をみれば、「寺坂小学校」は一八七四年（明治七）三月一五日に寺坂村のお堂を利用して開業し、一八七七年九月一四日に校舎が新築落成し、同年一一月六日に県官が臨席して開業式を挙行した。「福住小学校」は同じく一八七四年一〇月一七日に福住村荒木均の家宅を借用して開校し弘原小学校と称したが、後に鍛冶屋村の旧藩主の別邸を借りて移転し、一八七六年（明治九）九

写真 132　1874年（明治7）菅谷小学校の創立記念絵図

月に福住村字岩知花に新校舎が落成して校名を福住小学校と称した。校舎は三間に五間の二階建てであった。

「菅谷小学校」も一八七四年一二月二五日に荒木村川崎利平宅を借りて開業し、当時に描かれた創立記念の絵図がある（写真132）。一八八一年（明治一四）七月一一日には本校が新築落成し、県令森岡昌純が臨席して開校式を挙げた。「小野小学校」は一八七三年（明治六）九月二〇日、学制に従って口小野・奥小野両村の児童を対象に口小野村の本間果宅を借用して開業し、出石郡第四〇番小学校と称した（小野小学校創立百年記念誌には、明治六年九月一〇日口小野一番地の廃寺実相寺を借り受け仮校舎とす）とある。また、同年に宮内村浅井重成宅を借りて宮内・坪井・袴狭各村の児童を対象に開業し、出石郡第三九番小学校と称した。翌一八七四年（明治七）二月には小野・宮内の両校を合併し、口小野村瀬藤兵右衛門宅を借りて学校にあて、五か村の児童を教育した。翌一八七五年一〇月一二日には他にさきがけて新校舎が落成してここに移り、学校の体裁も確立した。

「小坂小学校」は一八七三年（明治六）一〇月に尾崎村善立寺を借りて開業し、尾崎小学校と称したのが最初で、その通学区は水上・長砂・鳥居・尾崎・森井・中谷・丸谷・大谷・三木の各村であった。一八七五年（明治八）五月には三木村龍谷寺を借りてこれに移り三木小学校と称し、翌年三月には大谷村片岡久右衛門宅を借りて移り大谷小学校と称した。その後同年九月から一八七八年（明治一一）八月まで森井小学校と称し、

表54　第三大学区・第二四番中学区・第二大区（現出石町関係分）学区表

小区	村・町	小学区	学校位置
区小一	谷山町	二八番	連区
	材木町		
	魚屋町	二九番	
	東条町		
	伊木町	三〇番	出石町
	八木町		
	内木町		
	本町		
	入佐町	三一番	
	宵田町		
	鉄砲町		
区小二	柳人町	三二番	
	小結町		
	田庄町		
	松枝町	三三番	
	馬場町	三四番	
	福住町		
	中村		
	長砂村		
	水上村	三五番	
	川原町		
区小三	安田村	三七番	倉見村
	良地村		
	多村		
	坪狭村	三八番[注1]	宮内村
	井内村		
	宮村		
	袴村		
	口小野村	四〇番[注2]	口小野村
	小野村		
	奥村		

小区	村・町	小学区	学校位置
区小四	寺坂村（畠・水石・日殿他）	四一番	寺坂村
区小六	伊豆村	五二番	伊豆村
	福居村		
	島村		
	丸谷村	五三番	鳥居村
	中谷村		
	尾崎村		
	森井村		
	鳥居村		
	片間村		
	三ツ木谷村		
	大谷村		
	細見村	五四番	荒木村
	荒木村		
	福見村		
	暮坂村		
	鍛冶屋村	五五番	鍛冶屋村
	上野村		
	奥山村		
	上野村	五六番	桐野村
	日野辺村		
	桐野村		

備考　1874年（明治7）2月改豊岡県史料による。

注1.　坪井・宮内・袴狭村を対象区域とする小学校を第38番小学校と記しているのは，第39番小学校の誤り。

2.　口小野・奥小野を対象区域とする第40番小学校は，1874年1月に第38番小学口小野小学校と改められる。

同年二月二七日に旧伊豆小学校区の一部であった片間村を当学区へ編入した。その後同年八月二〇日から広域地名の小坂小学校を称し、一八七九年（明治一二）六月一六日に至って本校舎が新築落成して開業式を挙行した（以上各小学校沿革誌による）。また、現在は小坂小学校区である伊豆・福居・嶋は五二番小学区伊豆村分に入り、一八七五年（明治八）に福居学校、翌年に伊豆学校が開業された。安良・田多地村は三七番小学区倉見村分にあり、一八七四年には寺院を借りて倉見学校が設けられていた。小学区の学区区分については一八七四年二月改の表54を参考にされたい。

開校時の状況と弘道小学校の新築　一八七二年（明治五）の学制施行は国民の義務教育制度の出発点とはなったが、その実現は至難の事業であった。ことに小学校の設立数は莫大で、一八七四年二月改正の第三大学区・第二四番中学区に当たる但馬国豊岡県管内を例にみても但馬の八郡を八大区・四〇小区とし、二一〇小学区に小学校数一二六校が開校している。これら小学校教育を義務制とはしたものの、修学は個人の幸福のためとし、学校経費は官費を支弁せず学区ごとの民費負担とした。特例として民力の及ばない場合のみ地方官に補助金を交付する規定はあったが、その適用はまれであった（一八七三年五月豊岡県は文部省に開設困難を訴え、補助金の交付を受けたことが「兵庫県教育史」に見える）。

このような状況下で開業した小学校であるから、前記したように学校

写真 133　明治初期の出石小学校（東大史料編纂所提供）

としての体裁の整った校舎が新築・整備されるには時間もかかり、地域差や内容差があった。学制発布の翌年に伝統ある藩校弘道館から受け継がれた出石小学校の場合などは、最も恵まれた特例ともいえよう。

学制の翌年に小学校を開業したのは出石小学校のほかでは小野と小坂小学校で、共に民家や寺院を借用したものであり、またその翌年に開いた寺坂・福住・菅谷の各小学校も村の堂宇や民家であった。それぞれ急造の寺小屋に小学校の看板を掲げた程度のものであったが、これらの中で最も早い一八七五年（明治八）一〇月に校舎を新築落成した小野小学校のようすを例にみよう。

一八七三年宮内村浅井重成宅に開いた出石郡三九番小学校と、口小野村本間果宅に設けた四〇番小学校は共に教師宅を小学校として借用したもので、旧出石藩士であった両者がそれぞれその教員に任ぜられた。名称は小学校であるが、個人宅に開かれた寺小屋そのものであった。三九番小学校では宮内・坪井・袴狭の児童に読書・習字・算術の三教科を教授し、四〇番小学校は口小野・奥小野の児童に読書と習字の二教科を教えた。翌年には口小野の民家ではあったが二校を合併して規模を拡大し、一八七五年一〇月に至って新校舎が落成してこれに移り、名実共に体裁が整った。

一八九一年（明治二四）に記述作成して郡長に提出した『沿革誌』には、「因ニ記ス区内ノ有志夙ニ教育ノ必要ヲ感ジ、朝旨ヲ奉戴シ将来ヲ図リ本郡ノ各地ニ率先シテ新築工事ヲ起セリ、然ルニ人民未ダ教育ノ必要ヲ感ゼザルノミナラズ学校ノ何物タルヲ知ラズ、故ニ頻リニ苦情ヲ鳴ス者アリト虽モ当路者飽マデ力ヲ尽シ千苦万慮忍耐以テ之レニ当リ、懇々彼ニ説キ是レニ諭シ以テ其成功ヲ逐ゲシハ実ニ其苦慮思フベキナリ」とよく当時の情況を伝えている。明治草創の当時新校舎建設のための戸割賦課金（国庫補助がない）、就学児童の

学費負担、更には貧しい農村生活の中で就学期の少年が家の重要な労働力でもあった当時とすれば、この小学校運営は大変な難事であったことが推測される。新築した小野小学校の規模は明確ではないが、一八七六年（明治九）九月に次いで新築落成した福住小学校の校舎は、三間に五間の二階建てで現在からみると小規模なものであった。

藩校から続いて唯一整備されていた出石小学校は、一八七六年三月二六日の出石町大火によって焼失した。強風下の大火で全焼戸数九六六戸、全焼寺社三九に及び、旧出石城東の伊木町にあった校舎も類焼し書籍・書類に至るまですべてが焼失した。そのため一時休校した後、同年五月には延焼をまぬがれた松枝町の空家（奥山屋）を仮校舎に当てて授業を再開したが、同年九月一日には東条町の宗鏡寺を仮校舎に借り受けて授業を続けた。当時出石町の復興が急務とされるなかで学校の再建はことに優先され、二年後の一八七八年（明治一一）七月二一日には内町の旧出石城三の丸の現在地に新築校舎が完成し、同年八月四日に兵庫県令森岡昌純が臨席して落成式を挙行した。その後一八八〇年（明治一三）一月には出石小学校の呼称を改め、伝統ある藩校弘道館の名をとって「弘道小学校」と称した。

初期小学校の制度と内容

一八七五年（明治八）『文部省布達々書及諸制規類』の第一号で「小学学齢ノ儀自今満六年ヨリ満一四年マテト相定候此旨布達候事（明治八年一月八日）」とあり、就学の年齢を明示している。当時の出石は豊岡県の時代で、一八七五年の教育状況を翌年八月にまとめて文部大輔宛に提出した豊岡県の『学事年報』には、「学区分合明治六年学区画定爾来更正ヲ加ヘ学校ヲ設置スルヲ以テ目的トナスト雖、山間渓谷ニ至ル民心興学ノ証トスヘキハ子弟ヲシテ学ニ就カシムルモノ日一日ヨリ盛ニシテ其最モ励

精勉学ノ生徒アルハ豊岡・出石・柏原・笹山・宮津・舞鶴・福知山・久美浜等ノ数校トス、各該校ノ如キハ生徒現数二百ヨリ五百名左右ニアリ」とあり、旧藩城下町を中心とした当時の先進地が万般にわたって優位に立ったことは当然であり、貧困な農村部での不就学は、就学期の子供が家計を支える重要な労働力であったことも原因していた。

また、その中で「当今ノ急務ニシテ逐次着手ニ及バントスルモノ左ノ如シ、従来ノ学区適当ヲ得ザルモノアリ、便宜改正ヲ加ヘ資金ノ充実スルヲ以テ目的トセザルベカラズ、校舎建設ハ生徒進否ノ関係スルトコロナリト雖現今ノ景況タル多クハ寺院・民家等借請ケ仮ニ学校トナスモノ狭隘ニシテ立錐ノ余地ナク動作進退其常ヲ失ヒ健康保存其法ヲ謬ルモノアリ、建設正規ヲ示シ将来改造ノ顧念ナキヤウ鼓舞誘導勗メズンバアルベカラズ、去秋小学生科施行爾来教師其人ニ乏キト書籍器械欠乏ノ聞アリ、教師陶冶ノ方法、書籍器械廉価購求セシムルノ策ナカルベカラズ（以下略）」とあるように、学校開設と共に教師の養成が急務となり、第三大学区第二四番中学区の豊岡県にも一八七五年（明治八）に豊岡師範学校が開設された。翌年の記録によれば教員は男子で一〇名、生徒も男子のみで三三三名、扶助金配布額四七二五円八一銭七厘と多額で、所轄は兵庫県であった（『学事年報』）。

次に一八七五年の『文部省第三年報』の「豊岡県公立小学校表」から、現在出石町分の概況を抜粋して表示すると次のようになる。

写真 134　『文部省第三年報』
1875年（明治8）

表55　豊岡県公立小学校表（出石関係分）

名称	地名	設立年	新築・旧屋	公有・借用	教員 男	教員 女	生徒 男	生徒 女	授業料	扶助金
出石学校	出石郡　出石町	一八七三年（明治六）	旧藩学校	公有	五	—	一七七	九一	有	—
啓明学校[注1]	〃　松枝町	一八七五年	民家	借用	一	—	五五	一九	有	—
倉見学校	〃　倉見村	一八七四年	寺院	公有	一	—	二八	八	有	—
口小野学校	〃　口小野村	〃	民家	借用	一	—	六六	一七	有	—
寺坂学校[注2]	〃　寺坂村	〃	〃	〃	一	—	二六	四	有	—
弘原学校	〃　鍛冶屋村	一八七五年	〃	〃	一	—	五七	九	有	—
福居学校	〃　福居村	〃	寺院	公有	一	—	二九	九	有	—
荒木学校	〃　荒木村	一八七四年	民家	借用	一	—	四〇	八	有	—
小坂学校[注3]	〃　森井村	〃	〃	〃	一	—	二五	九	有	—

備考　出典は、『文部省第三年報』による。

注1　啓明学校は、出石郡第二大区・第二小区のうち松枝・馬場・川原などを校区として一八七五年（明治八）に開校し、翌一八七六年には廃校した。

2.　弘原学校の設立年が一八七五年とあるのは、一八七四年の誤り、但し調査の行なわれた一八七五年当時には、鍛冶屋村にある旧藩主の別邸に移っていたものと思われる。

3.　小坂学校とあるが、小坂という広域名称が用いられるようになったのは、一八七八年（明治一一）八月二〇日以降のことであり、調査当時は尾崎村の善立寺を借り受けた尾崎小学校（一八七三年一〇月設立～一八七五年四月まで）か、もしくは三木村の龍谷寺を借り受けた三木小学校（一八七六年二月まで）のどちらかと思われる。

翌一八七六年（明治九）の『文部省第四年報』によれば、新設校のほかに校名・教員数・生徒数などの変化がみられるが、とくに注目を引くのは教員数の増加と女子教員の採用である。出石学校は前年の男子教員五名が九名に増え、ほかに女子二名の計一一名となり、小野学校は男子教員五名、福住は二名、荒木は五名とそれぞれ増加している。また新設校と新校名分は次の三校である。

表56　新設校及び新校名（出石関係分）

名称	地名	設立年	新築・旧屋	公有・借用	教員 男	教員 女	生徒 男	生徒 女	授業料	扶助金
奥山学校	出石郡奥山村	（明治九）一八七六年	民家	借用	一	—	一一	五	有	—
伊豆学校 注1	〃 伊豆村	一八七五年	〃	〃	四	—	三九	一四	有	—
倉見学校	〃 安良村	〃	〃	〃	二	—	二四	五	有	—

備考　出典は、『文部省第四年報』による。

注　倉見学校は、一八七四年（明治七）一月に設置され、同年七月に休校するが、翌一八七五年四月に再開。そして、一八七六年三月には小坂村福居学校・伊豆学校を合併し、同年五月安良善光寺に移転する。校区を上鉢山・安良・田多地・伊豆・福居・鴇と定め、安良学校と称した。その後、一八七八年（明治一一）になって善光寺跡に校舎を新築し、共和小学校と命名する。

学制に基づき義務化が強行された初等教育ではあったが、実際の就学状況はどのようであったのかを一八七五年（明治八）の『豊岡県年報』の統計表によってみれば、但馬全域の小学区数六三〇の学齢人員は七万一四八七人（男子三万七三八八人・女子三万四〇九九人）で、そのうちの就学者は二万二三三六人（男子一万七六一五人・女子四七二一人）、不就学者は四万九一五一人（男子一万九七七三人・女子二万九三七八人）となり、就学者は三一パーセント余の低率で、ことに女子の就学率は一四パーセントにも満たない状況であった。この数字だけでも当時の社会情勢と教育への関心の度合いをうかがい知ることができる。そして、いかに困難を克服するための努力が払われ、この後の教育が進展したのかも想像される。

また、当時の教育内容をうかがう一例に『生徒試験規則』がある。「第一読物、二・三ノ要所ヲ素読セシメテ後熟字ノ意味ヲ質問ス（以下略）、第二問答、毎人（まいじん）事物ヲ問答ス験法読物ニ同ジ、第三書取、諸物ノ名ヲ呼ビ示シ之（これ）ヲ紙ニ写サシム（以下略）、第四算術、日本数字ヲ塗板ニ書示シ算用数字ヲ以テ其答ヲ紙ニ書サシ

ム（以下略）、第五習字、文字及ビ其位置ヲ塗板ニ書示シ之ヲ紙ニ写サシム」（一八七五年『豊岡県督学局年報』）とあり、初等教育の内容がうかがい知られる。

教育制度の確立と進展

このころの小学校は、上等小学四年と下等小学四年に分かれ、満六歳になると下等小学八級に入学し、六か月して進級試験を受けて合格すると七級に進み、半年ごとに定期試験を受けて順次進んで一級に至り、卒業試験に合格して下等小学卒業となる仕組みである。更に進学を志すものは、上等小学第八級に入学して同様に進んで卒業すれば小学校課程をすべて修了したことになる。しかし、このころの就学率は低く、そのうえ中途退学者も多くて、一八七六年（明治九）の兵庫県下公立小学校生徒数七万六一三〇人のうち下等小学四年の卒業者はわずかに一〇〇余名であったという（『兵庫県教育史』）。

このような実情から兵庫県では一八七九年（明治一二）八月に「兵庫県簡易教則」を公布し、山間僻地で実施困難な地方では、下等・上等小学共に一年ずつを短縮して下等小学三年、上等小学三年の便法を講じた。また、政府でも同年九月に「教育令」を公布し学制を大幅に緩和して振興を図ったが、結果は学制公布以来の苦心と努力を阻害し、かえって小学校教育の不振を招く逆効果となった。教育不振の原因には、一般にその必要性の自覚が低かったこともあるが、最大の理由は貧困が原因している。前にもふれたように、就学期の子供は当時の農村社会では必要な労働力であり、実生活にあまり役立たない小学校に授業料まで支払って通学させるほどの余裕はなかった。

その後、一八八六年（明治一九）の「小学校令」によって我が国の教育は一新された。それは、小学校の義務制が明確化されて就学奨励が強力に推進されることになった。学制下においては、建て前としてしかその

実効をみなかった義務教育を「父母後見人等ハ其学齢児童ヲシテ普通教育ヲ得セシムルノ義務アルモノトス」と教育義務を初めて明確にし、尋常科（四年）・高等科（四年）のうち尋常科四か年を義務教育とし、貧困家庭児童は授業料を免除して修業年限三か年の小学簡易科を設けた。

また、一八九〇年（明治二三）一〇月の「改正小学校令」の第一条で教育の目標を「小学校ハ児童身体ノ発達ニ留意シテ道徳教育及国民教育ノ基礎並其生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授クルヲ以テ本旨トス」と明記し、道徳教育と国民教育を主軸にした日本人を養成する小学校教育の目標が決まり、太平洋戦争終了時までの国民教育を貫く理念となった。

また、この一八九〇年は「教育勅語」が発布された年でもある。前年には憲法が発布され、市町村制が実施されて我が国の中央集権的な近代国家の体制が整った時期であり、ことに教育勅語の発布を機にしだいに国家主義的傾向を強めることになった。当時の情況を『弘道小学校沿革誌』にみると、一八八七年（明治二〇）四月には「新令ニ基キ初・中・高等科ヲ改メ高等・尋常・簡易ヲ設置ス」とあり、一八九〇年（明治二三）九月一〇日「天皇・皇后両陛下御真影下賜奉戴式挙行ス」、翌年一月一七日「文部省ヨリ勅語謄本ヲ下賜セラル」とある。また、同月二一日には勅語奉戴式を挙行している。

このころからしだいに国家主義的色彩が濃くなり、とくに日清・日露の両戦役を契機にこの傾向はいっそう強まり、君が代・御真影・教育勅語の三つに象徴される教育、世界に誇る忠良な臣民の養成をめざす教育へと進んでいった。弘道小学校の沿革誌にも一八九二年（明治二五）には有志の寄付により銃器一〇〇組（村田銃）が新調され、一八九八年（明治三一）には小松宮殿下の迎送、翌年には管内巡視の伏見宮殿下の迎送に生徒一

同が武装して参列し、伏見宮から「本校生徒ハ規律・整頓・訓練其ヨロシキヲ得タリ」と褒詞を受けている。一九〇一年（明治三四）一月には校庭の築山頂上に独立した御真影奉安庫が落成し、同年一〇月一五日の校舎改築落成式には高等科男子による分列式と中隊教練が演じられている。

一方このような軍事的教育の流れとは別に、出石でも英語教育が行なわれていた。一八八九年（明治二二）創刊の『但馬会雑誌』第一号所載の但馬国の現況に「当国は去る一八年改正教育令発布後豊岡中学校廃止せられたるを以て、目下は只だ二高等小学校（出石・豊岡）及び一六・七の尋常小学校他簡易小学と二・三の私塾あるのみ（中略）、目下私塾の稍々見るべきは養父郡八鹿村に山陰義塾ありて英・漢・数の初歩を授け生徒凡そ八〇余名あり、豊岡の成蔭社（漢学塾）、出石の英語学舎等あれども何れも見るに足らず（以下略）」とあり、一八八七年（明治二〇）ごろに出石にも英語の私塾があったことは知られるが詳細は判明しない。また、一八九九年（明治三二）六月五日付で、申請していた出石の小学校高等科第二学年以上に限って男女共に英語科を加設することが許可され、小学校四学年女児に限って裁縫科を加設することも合わせて認可されている。次いで一九〇〇年五月には出石町立裁縫専修科を弘道小学校に設置することが認可されて、七月に開業式が挙行されたが当初の入学生は一〇名ほどであった。

また、このころ幼児教育への関心もしだいに高まりつつあった。出石の幼児教育は、一八九三年（明治二六）桜井勉の妻艶子と西山員直の妻花子らが出石婦人会を組織し、この婦人会が幼稚園を設置したことに始まる。一九〇四年（明治三七）一月一〇日には但馬婦人会の発会式が弘道小学校の裁縫室で挙行されたが、同日の午前には同校の雨天体操場を利用して日曜幼稚園が開催された。その後、同年九月には有志一〇〇名ほどが裁

表57　学齢児童就学・不就学の比較（一八九八年〔明治三一〕一月現在）

項目／町村名	総数			就学			不就学			学齢児童一〇〇人中の就学	
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	男	女
出石町	六二〇	三〇〇	三二〇	五三〇	二七八	二五二	九〇	二二	六八	九二・六七	七八・七五
室埴村	五二六	二五三	二七三	三五八	二一二	一四六	一六八	四一	一二七	八三・七九	五三・四八
小坂村	三三五	一六七	一六八	二一四	一四一	七三	一二一	二六	九五	八四・四三	四三・四五
神美村	六六四	三三五	三二九	三七五	二八一	九四	二八九	五四	二三五	八三・八八	二八・五七

備考　出典は、『出石雑誌』第二号による。

表58　就学児童既卒業・未卒業の区別及び不就学児童未就学・半途退学の区別（一八九八年一月現在）

項目／町村名	尋常小学校の就学						尋常小学校の不就学					
	既卒業			未卒業			未就学			半途退学		
	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女	総数	男	女
出石町	三三一	一六七	一六四	一九九	一一一	八八	五四	一八	三六	三六	四	三二
室埴村	二四七	一三五	一一二	一一一	七七	三四	九〇	一三	七七	七八	二八	五〇
小坂村	一三三	八〇	五三	八一	六一	二〇	六七	一二	五五	五四	一四	四〇
神美村	二四八	一七一	七七	一二七	一一〇	一七	一六二	二〇	一四二	一二七	三四	九三

備考　出典は、『出石雑誌』第二号による。

縫室に集まって幼稚園設立について協議し、後述する町立幼稚園の設置に発展した。

このような動向は出石だけの特例ではなく、時期に若干の前後はあっても全県下的な傾向であった。国の教育制度は一八九〇年（明治二三）の改正以降も、一九〇〇年（明治三三）と一九〇七年（明治四〇）に改正小学校令が出され、ことに一九〇〇年の改正令では、特別の場合を除き授業料を徴集しない義務教育の無償原則が確立し、明治末期には義務教育の六年制も確立した。これは、教育勅語の趣旨貫徹を期す政府の強い意志が就学の督励に効を奏したもので、明治末年には兵庫県の就学率は一〇〇パーセントに近い進展をみた。

町立女子技芸学校と大正期の教育　維新後の出石の女子教育は、いち早く一八七〇年（明治三）に前藩主の仙石久利が出石城下に「女学上校」と「女学下校」を置いたのが最初で、学制以降は小学校教育の中で行なわれていた。その後前記したように、一九〇〇年（明治三三）には「町立裁縫専修科」が小学校に併置された。一九〇五年（明治三八）八月山下博律なる人物が設立していた元私立の明石女学校が出石に移転し、当時の町長松井旗二ほか福冨源蔵・河野左源治・田辺文治・大石武兵衛・今井甚兵衛・国村信義の出石郡内有力者七名が設立者となり「私立出石女学校」が開設された。内容の詳細は不明だが、その後間もない一九〇七年（明治四〇）度限りで廃校することになったため、同年の一二月に小学校の別冊規定により「出石町立技芸学校」と改め小学校に付設して移行した。

その後、一九一二年（大正元）一二月には弘道小学校に隣接した南側に独立した新校舎がほとんど完成し、翌年四月一日から、小学校に付設していた女子技芸学校を校舎の階上に移すと共に、一八九三年（明治二六）から婦人会が経営していた幼稚園を出石町が引き継いで階下に入れ「出石町立幼稚園」として開園した。そ

の後技芸学校は、一九二二年（大正一一）四月に「出石町立実科高等女学校」となり、翌年四月には出石町外六か村の組合立に拡大した。技芸学校時代は五〇名程度であった生徒数が一躍して二〇〇名にも増えて四学級編成となり、遠隔生のための寄宿舎一三室も設置された。一九二四年（大正一三）六月には、校名を「兵庫県出石高等実科女学校」と改称し、その後普通科の女学校への移行が望まれて、一九三三年（昭和八）四月には県立に昇格し「兵庫県立出石高等女学校」と改称した。

大正期は第一次世界大戦を契機にした産業・経済の発展による好景気を迎えた時期で、国民生活の向上にともなって子弟教育にも余裕が生まれ、自由主義的風潮と共に教育熱も高まった時代であった。この影響を受けて小学校では、高等科への進学希望者が増加して高等小学校が増設された。また、女子教育面では裁縫など家事を中心とした実科女学校より一般教養を求める普通科教育が望まれて、県下でも多くが実科女学校から高等女学校に改変されていった。出石の場合もこの流れによるもので、一九三二年（昭和七）とやや遅れての実施であった（一九三二年五月に組織を変更して出石町ほか六か村の組合立出石高等女学校と改称したが、県立への昇格が望まれて同年一一月二四日の県会で移管が決定した。この日出石町では祝賀の提灯行列を行なうほどの喜びで、翌一九三三年四月から県立出石高等女学校と改称し出発した）。

また、この大正時代は女学校でもしだいにスポーツが盛んになり、制服も袴姿の和服から洋服に移行した時期で、中学校では外来スポーツの野球のほかテニス・サッカーなどが盛んになり、それらを代表する朝日新聞社主催の全国中等学校野球大会が開始されたのも大正期（一九一五年〔大正四〕）のことであった。

出石町立技芸学校時代（一九〇七〔明治四〇〕～二二年〔大正一一〕）の服装は、元禄袖の着物に海老茶または紺

写真 135　技芸学校当時の服装（県立出石高等学校『創立50周年』より）

の袴、同色の鼻緒の下駄に白足袋の和装であり、運動会には藁草履でダンスを踊った。実科高等女学校時代（一九二二～三二年〔昭和七〕）は和服の制服に履物は靴、そして洋服へと変化し、夏には竹野浜で水着を着けた臨海実習なども行なわれた。

大正期出石の小学校教育で、特筆されるものに弘道小学校の体育教育がある。一九一九年（大正八）七月当時の校長浅井重寿が、東京において開催された同校出身者の校友会の席上で母校の近況を報じ、「児童の体力増進を図ることが出石町の現在及び将来に対し焦眉の急だ」と説いた。これが反響を呼び、満場の同意のもとに在京有志で体育設備費を寄贈する協定ができ、一二名の参会者がその場で五〇〇余円を醵出した。その後も勧誘をひろげ、寄付総額は一二〇〇余円の巨額に達した。その主たる寄付者は仙石政固の金一封に次ぎ、池田謙三・長谷川直蔵・中山寿彦・竹村弟二・百瀬玄渓らの大口をはじめとする二七名で、郷党後進に対する教育への強い熱意が感じられる。

この資金で肋木・並行棒・跳躍台・平均台など最新式の体育器具を購入して設備を整えた。そして、当時九州帝国医科大学の教授で学校体育の権威者であった弘道小学校出身の桜井恒次郎博士（後述）を招いて講習会を開催した。桜井博士と彼に同行した兵庫県体操視学委員は「体操機械の完備せることは蓋し全国に於ても稀に見る所なり」と賞賛した。桜井博士は、その後も数回（一九一九年〔大正八〕・一九二一〔大正一〇〕～二四

年（大正一三）にわたって来校し、学校体育の指導をはじめ公開授業なども行なって県下に弘道小学校の名をひろめ、体育教育の模範校となった。また、このころ少年野球も盛んで、一九二四年には全但学児野球大会に出場して弘道小学校尋常部が優勝した。ほかに前後するが、一九一四年（大正三）四月二二日には、南極探検隊長白瀬中尉が小坂小学校などに来校して、四年生以上の児童を対象に講演を行ない、午後五時からはそれらの生徒を出石町の永楽館に引率して南極探検の活動写真を観覧させる行事もあった（『小坂小学校沿革誌』ほか）。

社会教育面では一九一六年（大正五）に「出石町青年会」が創設され、同時に青年会の「補修教育夜学会」も始まった。一九二一年（大正一〇）におけるその会員数は一二七名であった。また、一九一八年（大正七）には福住小学校に「実業補修学校」が、一九二〇年には小坂小学校に「農業補修学校」が併置開校されるなど、各学区ごとに補習学校が設けられた。またスポーツも盛んになり、一九二三年（大正一二）には出石町下谷に出石グラウンド（現県立出石高校グラウンド）が開設された。

しかし、大正期の自由主義教育には限界があった。欧米の教育理論を実践する段階で、明治期を通じ、ことに後半に固まった国家主義的な日本の社会構造の壁がこれを阻んだ。たとえば学校の軍事教練一つをみても、一八八六年（明治一九）の学校令によって学校教育の一部に取り入れられて以来、国家主義の台頭と日清・日露の両戦争でいっそう盛んになった。大正期に入ると自由主義教育の影響をうけて学校での軍事教育は軽視されがちになった。しかし、末期になると経済が不況に転じ、一九二二年（大正一一）には軍備縮少の旋風がまき起こって師団の廃止など兵員の大削減が行なわれたが、これは戦力の低下に直結するものであるとし、

それを補うために陸軍の現役将校を学校に配属して軍事教練を行なわせるというように、中学校以上の軍事教育の強化を図った。

また、社会教育にも軍事教育を組み入れ、一九二六年（大正一五）四月には「青年訓練所令」が公布され、七月には各学区ごとに青年訓練所を設け、既設の補習学校に併置した。ここでは小学校卒業程度の学力を基準にして四年間に公民科（一〇〇時間）、普通科（二〇〇時間）、教練（四〇〇時間）を履修し、教練規定の終了者には兵役六か月を短縮する特典が与えられた。間もなく昭和に入って青年訓練所は実業補習学校と統合して「青年学校」へと発展していった。一九二四年（大正一三）一月には「国民精神作興に関する詔書」も発布されていた。

青年団・女子青年団・婦人会などもそれぞれに郡から県へと連合体を結成させ、その上部組織である大日本連合青年団（一九二五年結成）や大日本婦人会（一九二八年〔昭和三〕結成）に加盟するなど、中央統制のもとで画一的な活動をする団体化が進みつつあった。このように、大正期の自由主義は伝統的な国家主義的性格が濃厚に残され、しかもこれが強化されるなかでの勃興であり、「伝統の枠内に規制されたデモクラシー」と評されるゆえんでもある。

昭和前期・戦時下の教育

大正期の好況は過ぎ、一九二三年（大正一二）九月には関東大震災に見舞われ、昭和に入ると金融恐慌が起こって産業界の不況と世界的な大恐慌が到来した。農村は疲弊し、都市では産業合理化が進んで労働争議が頻発するなど昭和の初頭は暗い幕あけであった。一九三一年（昭和六）九月には満州事変が勃発し、軍国主義の台頭と相まって産業界は軍事産業の重化学工業を中心に好況に転じた。

次いで一九三七年（昭和一二）には日華事変が起こり、戦火は拡大して終わりをみない長期戦に入り、戦時体制へと移行した。出石出身の代議士斎藤隆夫が一九三六年二・二六事件直後の議会で行なった粛軍演説や、一九四〇年（昭和一五）の日華事変処理をめぐる演説など、一方では戦争不拡大を訴える動きがあった。しかし、斎藤は反軍演説を理由に議員を除名され、その後間もなく既成政党は解党し、一億国民が一体となって総力を結集する国民組織としての大政翼賛会が発足した。

日華事変はその解決をみぬまま軍部の政治支配はますます強まり、一九四一年一二月八日に太平洋戦争に突入し、更に第二次世界大戦へと発展していった。一九四五年（昭和二〇）八月一五日には我が国の無条件降伏というかたちで敗戦の日を迎えた。昭和前期の教育は概説した経過の中で行なわれたもので、初期の不況期と戦時下におけるこの流れは全国的に共通するものではあるが、その一部を出石の代表校の弘道小学校と出石高等女学校の沿革誌などから拾ってみよう。

一九二七年（昭和二）五月に、日米親善のため渡来した「アメリカ人形」の歓迎会を弘道小学校で開いている。町長や女学校長が祝詞を述べ、幼稚園と小学校一年生児童の遊戯や唱歌が演じられた。翌一九二八年には弘道校の野球チームが八鹿の蚕業学校（現八鹿高校）で開催された山陰少年野球大会で優勝し、その後も但馬の野球大会でたびたび優勝を重ね野球の弘道校としてもその名を馳せた。また、一九三〇年（昭和五）以降に開催された全但少年リレー大会や全但ドッチボール大会にも優勝するなど、大正期から続いた体育の名門校としての活躍が目だった。

一方、一九二九年には高等科生徒二名の書方と図画が兵庫県の選抜を受けて天覧に供せられ、学校長が代

表して県に赴きその褒状の伝達を受けたり、同年の天皇陛下関西行幸時にも書方四点が選抜されて天覧を賜わるなど文化面での活躍も顕著であった。このような教育の流れも、一九三一年（昭和六）の満州事変以降は軍国主義的傾向の台頭で押し流されていった。

一九三三年（昭和八）弘道小学校は、名門意識と矜持（きんじ）の高揚から「弘道館尋常高等小学校」と校名を変更した。一九三六年（昭和一一）には、小学校教育精神作興大会が出石神社の社前で行なわれたり、二宮尊徳の銅像が校庭の築山に建てられ除幕式が挙行されている。その前年の七月に、町立青年訓練所と町立商工公民学校を統合し「出石町青年学校」が設置された（一九三九年〔昭和一四〕四月からは義務制となる）。一九三七年一〇月には、出石町国民精神総動員強調大会が開かれて小学校児童全員が参加した。また、一〇月二八日の上海方面戦捷（せんしょう）祝賀旗行列や後の南京陥落、除州戦捷祝賀旗行列などにも全校生徒が参加するようになった。当時のようすを『学校沿革誌』は「打振ル旗の波背山ノ新緑ニ映ユ」と記述している。

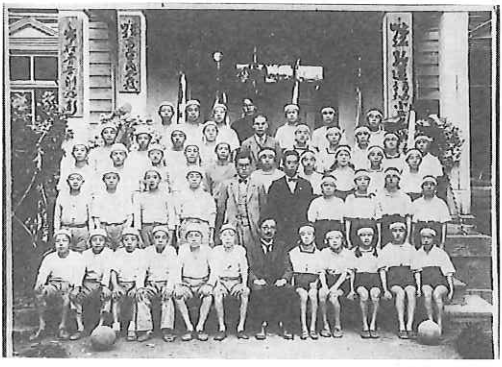


写真 136　昭和6年度(1931)全但ドッチボール大会優勝記念

出石高等女学校においてもこのころから出征兵士の見送りや慰問袋の作製がはじまり、国民精神総動員強調週間行事として、神社の清掃奉仕・古金属や古着の回収・日の丸弁当・応召軍人家庭奉仕などが行なわれ

た。一九三八年（昭和一三）には防空監視哨が福住の花山に設けられ、知事の辞令により青年学校生と在郷軍人の一部が服務した。翌年五月各学校に『青少年学徒ニ賜ハリタル勅語』が下賜された。「国本ニ培ヒ、国力ヲ養ヒ、以テ国家隆盛ノ気運ヲ永世ニ維持セントスル任タル極メテ重ク、道タル甚ダ遠シ、而シテ其ノ任実ニ繋リテ汝等青少年学徒ノ双肩ニ在リ（以下略）」とするものである。この年の七月には出石高女でも防空演習が行なわれ、一一月には出石高女愛国処女団を結成し、廃品回収や薬草採りなどによって得た収益で鳥取の陸軍病院を慰問した。

一九四一年（昭和一六）三月「国民学校令」が公布されて、全国の小学校はすべて国民学校と改称された。この年、出石神社の社頭で出石高等女学校報国団の結成も行なわれ、一二月八日にはついに太平洋戦争へ突入した。蚕食されたアジアの植民地を解放し大東亜共栄圏をつくる聖戦だとして、国内の体制も戦争遂行のためにすべてが結集され戦域は急激に拡大していった。出石では、一九四三年（昭和一八）一月に全国国民学校職員報国挺身隊出石郡報国会が結成され、四月には青年学校教育の強化を図るため、出石・室埴・小坂・神美の一町三村の青年学校を統合して「組合立出石郡西部青年学校」を設立し弘道国民学校に併置した。

八月には児童による報国草刈り運動が開始され、一二月に入ると出石高女の女子勤労挺身隊も結成された。翌年四月に県は出石高女など県立校に対して、教育の力をすべて戦力増強の一途に向けるよう強く求めるなかで食糧・薪炭などの増産を強調し、そのため朝礼や体操のできる場所のみを残してすべての空地を開墾す

写真 137　出石高女愛国処女団旗
（県立出石高等学校蔵）

るよう指示した。県より示された生産量は、炭六〇〇俵・薪三万六〇〇束であり、ちなみに当時の全校生徒数は二六〇名程度であった。同年七月には出石高女の三・四年生全員が川崎航空機明石工場や宝塚の東洋ベアリング工場へ勤労挺身隊として出動し、また在校生も授業を打ち切って薪炭生産や農園作業、町内の軍需工場作業に従事したため事実上学校教育は崩壊した。一九四五年（昭和二〇）四月出石高女の校長が職員会議で「授業の停止は教育の停止にあらず、勤労作業中心の教育を行なう、戦力増強を一途とする食糧増産・薪炭増産・勤労動員の三者にして学科は付随す」と訓示している。

国民学校の場合も挺身隊を除けばほとんど同様であった。敗戦が近づいた一九四四年からは、空襲を避けるための学童疎開が始まり、八月に神戸市立長楽国民学校の児童が集団疎開し、出石町内の各寺院に分宿しながら弘道国民学校へ通学した。また、翌年の六月には神戸市立西郷国民学校児童の一部が桐野の慈眼寺へ疎開し、寺坂国民学校に学んだ。

終戦直前の一九四五年七月には全国民学校に学徒隊が結成されるなかで、出石においてはその連合体である出石郡西部学徒隊も結成された。

このころは校地のほかに出石城跡などの空地も開墾し、学校農園を設けて食糧の増産を図ると共に、松根油（しょうこんゆ）の採集や肥料・飼料のための草刈り動員なども行なわれた。そのため出石城跡の桜はすべて伐採され、桜尾の出石鶴山（つるやま）も製炭と開墾で壊滅した。また、激化する都市の空襲を逃れて軍需工場の地方疎開も

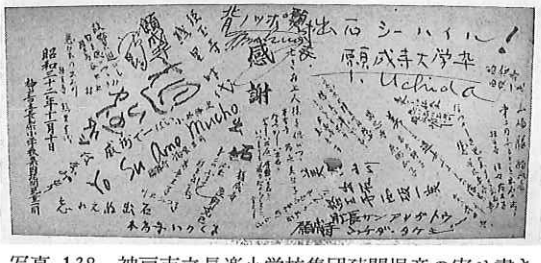


写真 138　神戸市立長楽小学校集団疎開児童の寄せ書き

行なわれ、授業の打ち切りで空いた校舎の一部は転用して工場に充てられた。たとえば弘道校には三菱電気株式会社伊丹工場が疎開したほか、出石高女の講堂などにも機械が搬入されたが、その直後に八月一五日の敗戦を迎え、稼動せぬままに経過した。

第二節　学問・教育界への進出と活躍

出石人の中央進出

明治維新による廃藩で失職した旧藩士の一部は、新政府の地方官や小学校などの教員に任用されたり、また地元で新規に事業をはじめる者もあったが、郷里の出石を離れて東京や京阪神へ転出し新天地を求める者も多かった。ことに新政府が所在する東京への進出が目だつが、当時は薩長閥が政治や軍事などの実権を牛耳っており、まして佐幕派であった旧出石藩士の進出は難しく、その分野の多くは学問や教育界が中心とならざるを得なかった。

なかでも一八七六年（明治九）三月二六日の出石大火は、町域のほとんどを焼失した大風下の大火災で、失職した旧士族に限らず都会への転出を強いる契機ともなった。もとより、これとは別に幕末期から志をたてて中央に進出していた加藤弘之や維新直後に上京した桜井勉らもあり、これら先覚者は後進の郷土人を受け入れる側にたつ人たちとなった。また、青雲の志に燃えて郷関を出て東京に遊学する者も増加した。その当時、これらの人たちが郷友の集まりとして「出石会」をつくり、更に広域化して「但馬会」が組織されることになった。『但馬会雑誌』などの記述によると、上京した但馬人が最初に定期的な集会をもったのは一八七五年（明治八）ごろで、出石出身者による「出石会」と豊岡学生の「郷友会」があったという。当時のよう

すは郷里の学友や旧故らが時々各所に集まって懇親を結び、演説や討論会をもって知識の交換を図ったものであった。その後出石・豊岡の学生が協議して会を合併し「但馬会」を組織するに至り、年四回の集会をもつようになった。

一八八〇年（明治一三）には「三丹会」と称して但馬・丹後・丹波の出身学生を組織し範囲を広げたが、運営上行き詰まって間もなく自然消滅した。その後出石・豊岡の学生らが再び協議して「同郷人の交際を深め、団結を鞏固（きょうこ）にし、知識を研磨し、徳行を脩養（しゅうよう）する」ことを目的に「但馬会」を再組織し、一八八六年（明治一九）一月に第一回会合を開いた。それが現在も継続している但馬人会の起こりである（在郷会員は除く）。

一八九二年（明治二五）当時の但馬会々員名簿により会員数を郡別にみると、養父郡二五名・朝来郡一一名・城崎郡二六名・出石郡五一名・気多郡四名・七美郡六名・二方郡二名・美含郡三名で出石郡は群を抜いて多数を占めており、出石郡でも一・二名を除くほとんどが出石町出身者で、その氏名を列記するだけでも出石人の中央への進出ぶりが察知される。

加藤弘之　加藤照麿　巖本善治　佐久間鞆彦　野崎民蔵　西村正治
島村継夫　山田確治　竹村節　青木匡　本間正木　杉立義郎（帝国大学医科）
桜井恒次郎（第一高等中学校）　百瀬達太郎（帝国大学医科）　池田謙三　長良敏郎　竹村尚義　金沢鶴吉
長谷川久次郎（慶応義塾）　森本駿　芦沢寿太郎　多根太郎　湯谷磯一郎　西山力（東京法学院）
国村隣次郎（明治法律学校）　河島良温　白井驥　武田大蔵（東京商業学校）　西山久義（陸軍士官幼年学校）　河野学（成城学校）
福富勇蔵　金子清之　麻見義修　麻見規矩夫　酒勾常明　松井昇

依田　稔　小山良吉　木槻幸吉　手塚光栄　手塚不二夫　熊谷辰太郎
竹村慶也　本間　莠　山崎忠門　白井　麟　堀田英治　河合要蔵
乗竹孝太郎　岩破常景　金沢吉蔵

（　）学校名は在学中

また、一八八九年（明治二二）の『但馬会雑誌』創刊号の賛成会員一覧には、前記した出石郡五一名の但馬会々員以外に地理局長・神社局長などを歴任する桜井勉、その弟で明治女学校や小諸義塾を創立した木村熊二らの名前も見える。前記した名簿には後に詳述する東京大学初代の総理・総長の加藤弘之、明治女学校長で女学雑誌を発行した巌本善治、加藤弘之の長男で明治天皇の侍医を務めた医学博士の加藤照麿、日露戦争中渋沢栄一らと共に軍資金調達に貢献して日本財界の両巨頭とまで称され、第百銀行・東京貯蔵銀行の頭取、東京手形交換所委員長を歴任した池田謙三、横浜洋銀取引所取締に就任した山崎忠門、農学博士で農商務省農務局長に累進した酒勾常明、法学博士で台湾総督府の高等法院長に任じた谷野格、医学博士で学校体育界の権威であった桜井恒次郎、日本で初めて植物帯の調査を始め北海道林業の先覚者であった田中壌、明治期日本洋画壇の先駆者の一人であった松井昇などは立派な業績を挙げた出石人である。

一八九九年（明治三二）三月七日東京向島の八百松楼で開かれた東京春期出石会の模様が『出石雑誌』第二号に記されているので補記しよう。幹事は青木匡と竹村慶也で、当日来会した主な会員は仙石政敬と同夫人・山崎忠門・酒勾常明と同夫人・間中藤雄・野崎来造・加藤正矩・神谷義雄・松井昇と同夫人・斎藤久慎・麻見規矩夫・斎藤隆夫・井上藤太郎・竹村強・伊藤蔓・垣谷信三郎・依田喜一郎・山越茲船ら合計六七人となっており、郷里から岡本・金沢・間中の三氏が上京したのに合わせて開催したもので、午後二時から九時過

ぎまで快談壮話し、歓をつくして解散したとあり、次の幹事は南挺三と斎藤隆夫となっている。

このように、中央に進出した多士済々の出石人は努力してよくその業績を挙げたが、一般には薩・長・土・肥の雄藩出身者の陰に隠れて衆知されていない。歴史事象を分類する場合、一般的には政治・経済・文化などとなるが、むしろこのような分類によるよりは、その時代を生きた個々の人間の経緯が時代をよく物語っているので、ここでは学問と教育を中心に特筆される出石出身の人物とその業績を略述することにする。

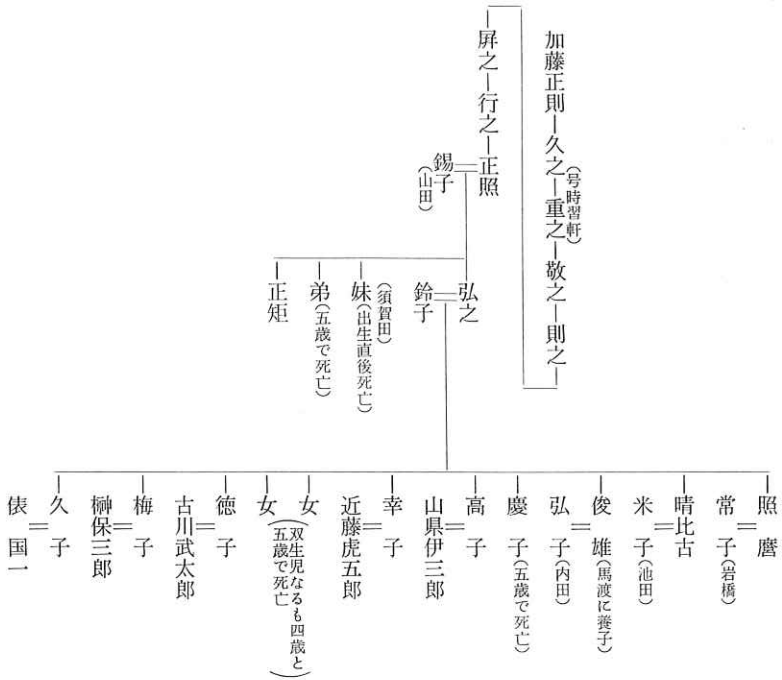
加藤弘之

通称弘之、一八三六年（天保七）六月二三日出石城下下谷に生まれた。父は加藤四郎兵衛正照、母は錫子といい同藩士山田孝徳の娘であった。その長男に生まれて初名を土代士（とよじ）と呼び後に弘蔵とも称した。実名は成之（よしゆき）後に誠之（あきゆき）と呼び一八六八年（明治元）に弘之と改めて以降はこれを称した。また、疑堂・左琴・貧叟とも号した。家は代々仙石侯に仕えて甲州流軍学の師範を勤め、父正照は藩の目付役から用人兼小姓頭に進み二二〇石と藩内では中の上級の家柄であった。

写真 139　加藤弘之

弘之の生まれた一八三六年は全国的な大飢饉（ききん）の年で、その前年の一八三五年には世にいう仙石騒動が起こり出石藩は五万八〇〇〇石から三万石に半減され、長く続いた徳川の幕藩体制も崩壊の危機に瀕（ひん）した動乱の時期であった。八・九歳の幼年期から町内の私塾に通い、一〇歳のとき藩校弘道館に学んだ。弘道館の学風は幕府教学の朱子学のほか、これに対抗する徂徠や仁斎の学風もみられた。ことに彼は、当時弘道館の教授で蘭学や西洋砲

表59　加藤家略系譜



備考　1. 加藤家歴代のうち久之・重之・行之は漢文学にも秀でた。
2. 田畑忍『加藤弘之』参照。

術などを修め藩内では進歩派の有志家であった多田弥太郎の大砲試射などを見てしだいに西洋への関心を培ったともいう。

一八五二年（嘉永五）一七歳の時父が用人として江戸勤番を申し付けられたので、これに従って上京した。当時の事情について、還暦の祝宴で経歴を述懐し「小生一七歳の時に父に随行して江戸に出ました。兵学の修業をなす心組でありました。小生の家は代々甲州流の兵学師範役を致し父も同様でありました。尤も父は甲州流兵学くらいでは今日

の戦争は出来ぬ故、西洋の兵学を学ばせる考でありました。因て甲州流の兵家をも訪て種々講義抔を聴きました。なれども別にまた佐久間象山先生の門に入て西洋兵学・砲術をも学びました。併しそれに就ては蘭学をすることが必要であると云ふことを考へましたから、夫より専ら蘭学に従事しましたが、その頃蘭学をなすは今日の状況とは全く違ひ、学校と云ふものもなく唯私塾のみであり、随て規則も立たず又書物も乏しくて実に困難なることであるのみならず、世間では蘭学抔をする者は夷狄同様なる者とて誠に受けが悪うございました。それらのことには頓着せずして五・六年学習して居る内に小生が二五歳の時に幕府の蕃所調所と申す洋学校の教官に挙げられました（以下略）」とある。

写真 140　加藤弘之の生家

西洋砲術家として令名の高い佐久間象山に学んだのは一年半ほどで、いったん帰国した後一九歳で再度上京した時には、象山はその門下生である吉田松陰の脱国事件に連座して罰せられ信州松代藩に幽閉されていたので、止むなく芝の大木塾に入門して蘭学を学んだ。大木仲益は蘭学者で幕府の洋学校蕃書調所の教授でもあり、大木塾には塾長の坪井真友や大鳥圭介らの先輩がいた。

一八五五年（安政二）に父が死去したのでいったん帰国し、翌年には大木塾に帰って貧困の中で鋭意研讃を続けた。当時の苦労の様子は自叙伝にも「綿なしの敷蒲団を用ひたこともあり、又衣服を洗濯させるに着換えがなくて、こまったことも随分あった」と記している。一八六〇年（万延元）三月恩師ら

の推薦により、幕府から蕃書調所教授手伝に任用され、学校の蔵書を自由に利用できる環境に恵まれ、好学の志を満たすことができるようになった。このころに西洋哲学・倫理学・法学等の書物を読み、感ずるところがあって蘭学のほか英・仏・独の諸学も学び、ことにイギリス学に興味をもったが、間もなく当時は誰も注目していなかったドイツ学を手掛けその先駆者となった。還暦祝宴の述懐にも「此蕃書調所は後に開成所と改称せられました。其頃蕃書調所に和蘭・英吉利より種々の書物を買入れました内に哲学・道徳学・政治学等の書物が始めて参りましたが、夫れ等の書を見ると甚だ面白くなりましたから、小生の当然学習せねばならぬ兵学を止めて、右等の書を学ぶことに致しました。尤も兵学を止めたのは唯其の理由のみでありませぬ。既に世間に兵学をする人は沢山ありますのに、右哲学・政治学等の書を研究する人は未だ殆どありませぬ故質問することも出来ず、唯自分のみで考へて読むこと故今日の学校の研究抔には迚も比較は出来ませぬ。又其頃より少しく英学をも始めかけて見ましたが、更に独乙学を始めて此方を専らいたしました。独乙は西洋各国中最も学問の盛なる国故、将来大に利益あるべしとの考より始めました。其頃は独乙学をする人は一人もありませんので市川斉君と二人で始めましたが（以下略）」とその経緯を述べている。

政治書や歴史書などで西洋各国に立憲政体なるものがあることを知り、日本にもこのような政治をたてたいと考えた弘之は、一八六一年（文久元）二六歳の時に、立憲政体上下両院のことを略述した我が国最初の立憲政体論である小冊子『隣草』を著わした。維新直前の幕末期のことであるがために、日本の政体を西洋に真似るのがよいということは憚らねばならないので、隣国の支那に立憲政体を立てるべしという趣意を論じて『隣草』と書名をしたものである。

次いで一八六五年（慶応元、三〇歳ごろ）に『交易問答』を著わした。それは、攘夷論が盛んで外国との交易を非難する風潮が強かった当時に、外国との交易は国の隆盛を招くものであることを通俗の問答体で論じたものである。またこのころ『西洋各国盛衰強弱一覧表』も著わし、一八六八年（明治元）には『立憲政躰略』を著わして各国の政体を論じ、翌一八六九年四月に賤称廃止の建議を行なった（『兵庫県史』）。更に一八七〇年（明治三）には天賦人権思想に根ざして、西洋諸国の政治の仕方の大略を論じた『眞政大意』上下二巻を著わした。

写真 141 『國法汎論』

職歴は、それより以前の一八六四年（元治元）に幕府の直臣に抜擢されて開成所教授職に、また一八六八年（明治元）三三歳の時に幕府の目付に任ぜられ、次いで大目付で勘定頭兼務に累進した。明治維新後は朝廷から政躰律令取調御用掛を仰せ付けられ、その後一八六九年三四歳の時に大学大丞となり、翌年には侍読を兼務して五・六年間明治天皇に政治学を進講した。更に、一八七二年（明治五）にはドイツ人ブルンチュリの書を翻訳して『國法汎論』を発刊し、一八七四年に後藤象次郎・板垣退助・副島種臣・江藤新平らの民選議院設立の建白に対して時期尚早を唱えその建議を撃退した。

経歴の述懐に「小生は幕府の時に於てさへ前に申した如く隣草を著して立憲政体を主張したる程なれば、明治七年に民選議院開設論が出づれば無論大賛成すべきことなるに何故に之を駁撃せしやとの疑ひが起るに相違ないことで、実に尤千万であるがそれには少しく訳があり

ます。小生が隣草を著はしたる頃は小生の学問も猶甚だ浅くありました故、他の美を見て直に倣はんとの考を起したることなれども、更に歴史上のことから又国家の現状を考察して見れば立憲政体を直に設立するは決して策の得たるものにあらずと存じたる故でありて、一言に申せば幕府の時に立憲政体を立てねばならぬと考へたは全くの書生論であったのであります（以下略）」とある。

翌一八七五年（明治八）には元老院が設置されて四〇歳でその議官となったが、健康などの理由で間もなく辞任し『立憲政躰起立史』などを翻訳して刊行した。一八七七年には開成学校総理の職を文部省から嘱託された。その後開成学校は東京医学校と合併して東京大学（法学部・理学部・文学部・医学部の四学部からなる総合制）となり、彼は九か年間当該学校の総理の職に任ぜられた。一八八六年（明治一九）、時の文部大臣森有礼と議が合わず、総理の職を辞して元老院議員に転じた。

一八九〇年（明治二三）再び東京帝国大学総長となり、貴族院議員にも勅選されて、文学・法学の二博士号を授与された。一八九三年（明治二六）三月健康上の理由で総長を辞任したのち宮中顧問官となり、次いで男爵に叙せられた。その後一九〇一年（明治三四）に東京帝国大学の名誉教授、更に一九〇六年（明治三九）には枢密顧問官となり正二位勲一等に叙せられ、一九一六年（大正五）二月九日八一歳で逝去した。

その著書は、前記した『隣草』をはじめ『交易問答』・『眞政大意』・『立憲政躰略』・『國躰新論』などを著わして大いに天賦人権思想を説いたが、のちにこれらを否認して絶版に付した。一八八二年（明治一五）以降の著作は、『人権新説』・『強者の権利の競争』・『道徳法律の進歩』・『自然界の矛盾と進化』・『吾國躰と基督教』・『迷想的宇宙觀』などで、唯物論・利己心説・生存競争説を鼓吹し、ドイツ流国家主義を説くなど前者と対

立した思想を紹介した。このうち『強者の權利の競爭』は一八九三年（明治二六）にドイツ文で出版し、のちに邦文で出版をしたもので彼のドイツ語学の力量が知られる。

これらの事情について経歴述懐に「小生は初め吾人に天賦人権と云ふものがあると云ふ所謂性法学派の説を信用し、甚だしきはルウソウの民約説迄も信用して居りましたが、其後種々の学者の書を読むに至りて、以前の如き空漠過激なる人権説を信ずる心は消滅しましたが併、吾人に天賦人権のあると云ふことは猶多少信じて居りました故其頃の著書は皆天賦人権主義を根拠として論じました。前述の国体新論は最も此主義を主張したる書でありました。夫れ故遂に国学者らの怒りに触れました。右様の人物を大学の総理にいたし置くのは政府の不注意である（中略）然る所小生は既に数年前より進化説を信ずることとなりて、最初信仰の天賦人権説は最早空想論として全く取らぬことでありた故、従来著述したる書は大抵取消さねばならぬことになりて居りました。併し、従来の著述を取消すには先づ新主義の著書を出さねば不都合である故、取り急ぎ新主義の著述に従事して居る最中に右国体新論の内論が出ました（中略）右三書（國躰新論・立憲政躰略・眞政大意）は主義の変じた以前の著述にて、其論拠は多少天賦人権主義に出て居ることで早晩自分にて取消さんと考へて居りたことであるゆへ右の如く三書共一時に絶版しました。而して小生の新主義即ち進化主義は前記『人權新説』並に其後の著述なる『強者の權利の競爭』及び『道徳法律の進歩』と申す三書並に『加藤弘之講論集』其外『天

写真 142　『迷想的宇宙観』
（岡本久彦氏蔵）

則』と申雑誌にても随分論じてあります(以下略)」とある(第三章第二節 加藤弘之と斎藤隆夫の論争の項参照)。

雑誌『天則』は、一八八九年(明治二二)より翌年にかけて弘之自らが一人で編集刊行したが、大学総長に再任されて多忙になったため以降は他に委ねて続刊した。弘之には多くの子があり、明治天皇の侍医にもなった長男の照麿や、六女徳子の婿古川ロッパ(武太郎)が著名である。また、小説「奔流」や「ある夫人の記」その他随筆なども多く著わし、雑誌「ウーマンカレント」を発刊した三宅やす子は弘之の孫に当たる。

桜井　勉

一八四三年(天保一四)九月一三日出石伊木町二番屋敷に生まれた。桜井氏は代々藩主仙石侯に仕えた儒官の家柄で、父は石門(通称一太郎字は伯蘭、本名茁また一棹)と号し、藩の参政でその長男であった。幼名を熊一、字を伯勧といい児山と号した。児山は、出石城があった有子山麓の一部を桜井家が拝領して有子山園を結んだことから名付けたという。一八五〇年(嘉永三)三月八歳で藩校の弘道館に入学し、また父石門の門弟であった堀田省軒の私塾「黙識斎」や島村弘堂の「松琴楼」にも従学したほか、抜剣を白井廉之助、撃剣を西川惣左衛門、馬術を依藤左右蔵、越後流軍学を西川順蔵に学ぶなどの英才教育を受けた。

一八六〇年(万延元)三月一八歳の時、文学修業のため九州に遊学して豊後臼杵の白石素山(一八一五年〔文化一二〕～一八八三年〔明治一六〕)に学んだ。翌一八六一年正月桜井は、筑前に遊学して槍術を学んでいた同郷の友人西山員直と会い、臼杵から筑前福岡へ赴くために肥後熊本の鮓屋伍作の宿に泊まったが、たまたまこの宿で同郷の勤皇家田中河内介ら一行に邂逅した。当時のことを桜

写真 143　桜井 勉

井は、一八九三年（明治二六）刊の『中但紀行』に「万延二年ノ春余一九歳西山伯準ト熊本ニ遊ヒ一旅店ニ宿ス、田中河内介其子瑳磨介と共ニ亦同店ニ在リ、余輩カ但馬人ナルヲ聞キ会面スル事ヲ求ム、余輩諾シテ相見ノ礼ヲ行ヒ其卿貫ヲ問フ、曰中山殿下ノ臣ナリト、為メニ途上ノ詩ヲ書シテ之ヲ示ス、坐ニ二客アリ其一自ラ謂フ余ヤ耳聾ス人言ヲ聞ク能ハスト亦為メニ和歌ヲ書シテ之ヲ贈ル、其姓名ヲ問フ、曰ク穴門隠士田中作八清風ナリト余当時河内介ノ何人タルヲ知ラス、其後太宰府ニ至リ河内介ノ侄小森幾太郎（千葉郁太郎）ニ遇フ、幾太郎ハ出石郡香住（現豊岡市）医師某ノ子曾テ我省軒堀田先生ノ黙識斎中ニ寓セシモノナリ、談話良久シテ始テ河内介の出石郡人ナルヲ知レリ、然レドモ未タ作八ノ何人タルヲ知ラス、其後平野国臣（筑前の勤皇家で生野義挙の主謀者）ノ豊岡藩ニ拘セラルヽヤ、看護者木下八郎ニ謂テ曰ク、余熊本ニアリ出石藩士西山・梅井二氏ニ邂逅セリ、西山沈毅、梅井壮快後来ヲ望ムヘシ君之ヲ知ルヤト、八郎ハ伯準（西山員直）ノ親戚ナリ、之ヲ聞テ曰ク、西山ハ我親戚ナリ、而シテ出石梅井ナル者ナシ、豈桜井ニアラサルヲ得ンヤ、国臣手ヲ拍テ曰ク然リト、其後八郎伯準ニ語ルニ此事ヲ以テス、始テ作八ノ平野次郎ナリシコトヲ知レリ（中略）熊本ニアリテ余ニ贈リシ詩ハ恰是在家呼酒時ノ七字ヲ記スルニ過キス（七文字だけを記憶しているの意味）西山伯準ニ贈リタル和歌ハ武夫ノ心定メテツク鎗ハ鉄モ巌モ透スヘラ奈利（以下略）」とあり、同席した他の一人は薩摩の勤皇家美玉三平であったという。

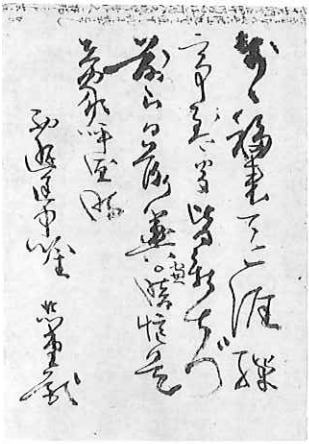


写真 144　田中河内介が桜井勉に送った詩
（岡本久彦氏蔵）

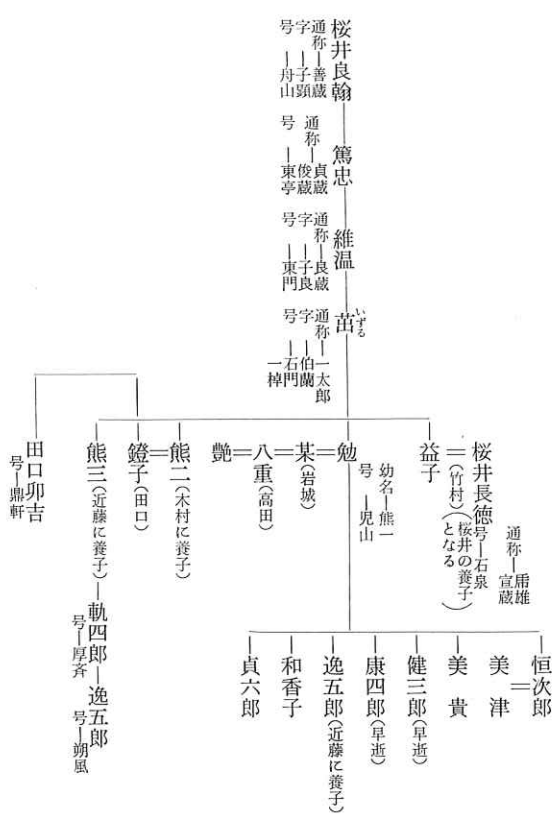
その後一八六四年（元治元）六月、二二歳で江戸に出て幕臣芳野金陵及び中村敬宇に従学し、更に一八六七年（慶応三）五月には伊勢の漢学者土井聱牙（ごうが）に学んだ。聱牙は眼病で左眼を失ったにもかかわらず「資治通鑑」を校したほどの反骨の学者として知られた人物で、出石藩ではほかに井上貞吉も同氏に学んだ。桜井はこれらの勉学により陽明学派の実践的学問を身につけていたが、このころ出石藩が藩校弘道館の教授であった島村弘堂の後任に桜井の起用を求めたことと、徳川慶喜が将軍職を辞すなど風雲急を告げる状況下であったため、一八六八年（慶応四）の正月聱牙に別れを告げて帰途についた。その途上で鳥羽伏見の戦いのようすを見聞して帰藩し、出陣をして久畑に布陣していた藩主仙石久利に状況を報告した。

この年出石藩貢士に任ぜられたがこれは明治政府が同年の二月一〇日に諸藩に命じて出させた役職で、大藩は三員、中藩は二員、小藩は一員を選任して京都に参向させたものである。この時、桜井は二六歳であった。間もなく八月には藩の周旋方に転じ、九月に弘道館講師を拝命した。一八六九年（明治二）六月には薩・長・土・肥以下諸藩主の版籍奉還による藩制改革が行なわれるが、桜井は出石藩権少参事に任ぜられ知藩事（仙石久利、一八七〇年〔明治三〕一月二八日より仙石政固）を助けて民政の安定に尽くした。

とくに教育には熱意を傾注し、士族学校の藩校弘道館のほかに一般や女子教育のための「市街学校」・「士族女子学校」・「市街女子学校」を出石に設け、別に「郡村学校」を旧領内の久畑・安良・江原・竹野・訓谷に新設することを進言し実践した。それは、明治政府の学制発布より三年も前のことであった。また、一八六九年（明治二）一一月二二日、城下はずれの鐘鋳谷（かねいだに）を楽々園と名付け、四民歓楽忘憂の地となすことを出石藩知事仙石久利が管下に布告し間もなく開園したが、これを建議推進したのも桜井だという。園地の整備造

成のため士族屋敷の樹木や泉石を移し、取り払った空地には桑や茶などを植えたり、蔬菜をつくって窮乏した士族生活の一助にしたという（士族戸数約三〇〇戸余り、卒族を加えると六〇〇戸余り）。この当時に一般庶民の福利を対象に新設された公園は全国的にも珍しく、また時期的にも最も早期の公園として庭園史に特筆されるものであった。一八六九年一二月には権大参事に就任ししだいに藩内で重きをなすようになり、一八七〇年（明治三）一〇月には出石藩大参事に任ぜられた。出石の地は要害堅固であるが交通不便のため、藩庁を藩内で最も利便の地江原に移動することを企てて太政官の許可を受け、宵田町の蓮生寺を仮出張所として土岐久則を駐在させるなども行なった。

表60　桜井家略系譜



一八七一年（明治四）七月廃藩置県が行なわれ、出石藩は廃止されて出石県と改称された。桜井は引き続いて出石県大参事となり、廃藩置県にとも

なう旧藩の負債処分や旧藩士の秩禄処分、士族の自働自活などに努力を注いだ。

一八七一年一一月には出石県が廃止されて豊岡県に併合されたので、桜井は同年一二月八日付で松山県権参事に任ぜられて転出した。次いで翌一八七二年には大蔵省の租税寮七等出仕に補され、それ以降諸職を歴任した。この間に当時参議であった大隅重信や大蔵卿大久保利通に属目されて一八七七年（明治一〇）に内務権大書記となり、その後内務省地理局長に任ぜられ、一八七九年（明治一二）三五歳の時に山林局長となった。独創的で学究派の桜井は、官林調査と官林作業を推進し、樹木試験場を設置するなど我が国森林行政の基礎を築いた（長池敏弘著「桜井勉の生涯とその事蹟」『林業経済』）。

また、地理局長になった一八七八年当時の地理局は内務省の重要部局で、現今の国土地理院・林野庁・気象庁・地質調査所のほか経済企画庁・環境庁の一部及び東京大学史料編纂所などの仕事を管轄していた。桜井は、一八七九年地理局に山林局と地質調査所を併置することを内務卿伊藤博文に建議し、それが実現するや自らは山林局長に転じた。後任の地理局長に長州出身の品川弥二郎が任ぜられたが、翌一八八〇年（明治一三）には再び桜井が地理局長となり、一八八九年（明治二二）一二月に徳島県知事に転出するまでこの要職にあった。在任期間は、一次・二次を通算すると一一年余りにも及んだ。

この地方官（徳島県知事）への転出は、当時における薩・長閥の強権下での左遷であり、早くから自由民権運動が盛んな土地柄で県知事として赴任した桜井は、かつて中央官僚であったがために阿波自由党の猛攻撃を受けて苦闘したことや中央の藩閥政治との確執もあってか、一八九一年（明治二四）九月五日に依願免本官となり、郷里出石に帰って隠居した。その翌年三月に『出石郡経済論』、五月には『出石町要務論』を発表

するなど郷土の殖産興業に関心をもった。また、日清戦争さなかの一八九四年（明治二七）九月に行なわれた衆議院議員の選挙には、地元の兵庫県第九区から立候補して当選した。それは、板垣を総理とする自由党からの出馬であった。

一八九六年（明治二九）板垣退助が内相のとき桜井は山梨県知事に任ぜられて善政を敷き、次いで一八九七年（明治三〇）五月には日清戦争により日本領土となった台湾の新竹県知事に転出したが、翌年五月に依願免本官となって帰郷し再び隠居した。その後、一九〇一年（明治三四）四月には内務省神社局長に就任し、翌年五月に依願免本官となり六〇歳で退官した。

一九〇七年（明治四〇）六月には錦鶏間祗候の待遇を受け、晩年は故郷出石に隠棲して自邸有子山園で悠々自適の生活をおくり、一九三一年（昭和六）一〇月一二日八九歳の高齢で逝去した。永く尽くした官界での功績に対する処遇は、正四位勲三等であった。

彼は才気煥発で深遠綿密な篤学の人であり、ことに郷土愛が強く老後は出石にあって地方自治・産業奨励・教育振興のほか、郷土史研究に力を尽くした。その著作は、『校補但馬考』をはじめ『乙未記事』・『出石年表』・『投

写真 146　『校補但馬考』

写真 145　『出石郡経済論』
（出石神社蔵）

淵写興』・『石城紀感』・『中但紀行』など多数にのぼる。その代表著書である『校補但馬考』は、彼の曾祖父桜井良翰（号舟山）が藩主仙石政辰の命を受けて但馬の故事を集めて一七五一年（寛延四）に選述した『但馬考』をもとに膨大な校補を行なった大著である。それは、実践的な学問を身につけた青年期の遊学から、地理局長・神社局長などを経験して得たその総力を投入した畢生の大事業とみることができる。この校補には井上頼圀・池内宏博士らのほかその賛助者は四〇名にも及んだといい、一九二二年（大正一一）八〇歳の時に完成して発刊された。まさに出石文化の頂点を示す名著であり、当時における地方史の代表的著作として世に知られる。また、このほかに自伝的懐旧談を併録した『児山櫻井勉翁米壽賀集』（一九三一年（昭和六）刊）がある。

木村熊二

文豪島崎藤村が小諸城址の碑文に「われらの父」と書いた蓮峰木村熊二は、一八四五年（弘化二）一月二五日に出石藩儒桜井石門（名は英、通称一太郎）の次男に生まれた。熊二は、明治政府の地理局長・神社局長などを歴任した桜井勉（幼名熊一、号児山）の次弟である。彼は弱冠八歳で江戸に遊学して久保庄左衛門や木村琶山らに従学し、一〇歳のとき琶山の養子となり、その後も佐藤一斎や安積良斎らに学び、一八六三年（文久三）一九歳で幕府に仕えて歩兵局御徒士目付となった。それは、木村家が幕府旗本であったからである。同年彼は、幕府御家人田口耕三の長女鐙子（一七歳）と結婚した（『日本開化小史』などの著作で知られる経済学者の田口卯吉は鐙子の兄で、儒者佐藤一斎の曾孫に当たる）。

一八六五年（元治元）の長州征伐や、一八六八年（慶応四）正月の鳥羽伏見の戦いでは幕軍に属し参戦した。そして、最後の戦いとなった江戸攻防戦（旧幕臣によって結成された彰義隊と維新政府軍の戦闘―上野戦争―）の時には勝海舟の幕下にあり、官軍の総攻撃を控えた前々日勝邸において「彰義隊の目的如何ではこれを応援しよ

う」と話が決まった際、勝に「そんな不用な命があらばわしにくれ、犬死にするより勝に生命をあずけた方がイーゼ」と言われてとどまり、その後に海舟と熊二らの親分・子分の関係が生まれたという（東京女子大学所蔵「木村文書」）。また、「木村文書」には「当時幕府の歩兵局には陸軍所という海外兵書の翻訳や研究をする場所があって、長州の村田蔵六（後の大村益次郎）が密偵として潜入しており、長州征伐前に旅費のほか金を給し旅行券まで与えて帰長させた。その蔵六が官軍の江戸攻めには大村益次郎と更名して、一方の大将となり来攻したのは棒腹（業腹）に耐えざる感がある」（要旨）と熊二が書いており、当時の世情の一端がうかがい知れる。

敗者側に立った熊二は、佐倉定吉と変名して官軍の追求を避け、一八七〇年（明治三）一二月三日アメリカ船グレートレパブリック号で森有礼（後の文部大臣）らの一行に加わって渡米した。途中でこの一行と離れ、ミシガン州のホープカレッヂやニュージャージ州のニュープリンスウイック神学校、更にはニューヨーク大学の医学部にも学び、語学や宣教師資格を受けて一八八二年（明治一五）九月に帰朝した。彼のアメリカ留学は一二年間にも及び、その間子祐吉を抱えた妻鐙子は大変苦労し、内職の裁縫のほか暮夜に物を路傍で売ってようやく衣食を購ったといい、このころに勝海舟の経済的庇護を受けたことが『海舟日記』にも見える。

写真 147　木村熊二
（年誌『巌本』より）

帰国後の熊二は、政官界入りを勧められたが「旧幕の遺臣は明治の世には無用」と断ってキリスト教の伝道と女子教育に従事した。一八八五年（明治一八）には鐙子を取締に、自らが校長となり東京巣鴨の庚申塚に「明治女学校」を開校した（一八八七年〔明

治二〇）までに日本人の手で創立された女学校は、全国でわずか七校である）。校舎は兄の桜井勉が本郷区駒込に住宅を新築して移住したので、この桜井の旧邸を改造して利用した。当時の様子を明治女学校の卒業生で作家の野上弥生子は、「巣鴨でも誰かの別荘だったといふ白ペンキ塗りの小さい洋館の階上・階下で四つの部屋が教室になっており、それに二階建の日本間がつぎ足されて一部は寄宿舎、二階の一番ひろい部屋は講堂代りに使はれた（以下略）」と『回想の内村鑑三』の中に書いている。誰かの別荘とあるのは桜井勉の旧邸であった。

また同年には『女学雑誌』も創刊されて、明治女学校と共に当時の女子教育を大いに啓蒙することになった。しかし、開校間もない一八八六年（明治一九）八月一七日学校運営の実務を担当していた妻の鐙子が三九歳の若さで病死した。そこで熊二と同郷の弟子であり、明治女学校の教頭であった巌本善治（後述）に学校運営その他一切を委任した。この後、明治女学校も女学雑誌も巌本により明治後期まで継続されることになる。わずかな期間ではあったが鐙子の学校経営ぶりは熱心で、学校事務一切と管理から教師や生徒の世話のほか、一週間に五日は必ず寄宿舎に赴き起臥して寝食を共にしたという。

妻鐙子の死後は校長も巌本に譲り、傷心のためかしばらくは熊二に目立った活動はみられないが、一八九二年（明治二五）ごろに旧出石藩主仙石氏の出石移封前の故地である信州小諸近くに移り住んでいる（日本キリスト教会伝道局から、野沢町周辺の伝道のため派遣された）。翌年一一月には有志と図り、自学自習を掲げて「小諸義塾」を創設して自らその塾長に就任し、若くして有能な島崎藤村らを抜てきして教師に迎え、俊才を集めて教育したので小諸義塾の名声は高かった。熊二と藤村との出合いは一八八七年（明治二〇）ごろに始まる。

熊二は、自分が創立した明治女学校のほかに東京の「共立学校」で教鞭をとっており、同校に入学していた藤村との師弟関係がここで生まれた。間もなくして藤村は明治学院に転校するが、その後も近くの台町教会に通ってそこの牧師であった熊二の手で洗礼をうけた。藤村は、熱心なキリスト教的教育者の熊二に魅力を感じてたびたび彼の家を訪問したり、一時は寄宿させてもらったこともあるという（一八八三年〔明治一六〕五月に東京で開かれた全国基督教信徒大親睦会の記念写真には、海老名弾正・内村鑑三・新村襄・植村正久ら当時我が国キリスト教界の代表的顔ぶれと並んで木村熊二が写っており〔岡見璋著「木村熊二の迷」〕、我が国キリスト教界の草分け的存在であった）。

また、藤村は熊二の紹介で巌本善治とのつながりもでき、女学雑誌の原稿執筆や明治女学校の教師にも就任した。藤村の『桜の実の熟する時』には、女学雑誌の執筆のことや明治女学校の教師となり教え子に失恋して関西へ漂泊の旅をするまでを描いている。熊二は、小諸義塾のほか一九〇二年（明治三五）には同じ小諸に「女子学舎」を創設したが、ここでも藤村を教師に登用している。その後、一九〇五年（明治三八）になって愛顧していた藤村が作家活動に専念するために小諸を去ったのを機に、翌年には小諸義塾も廃校し、ここに熊二の夢は終わりを告げることになる。熊二を慕う藤村は、小諸城址に建てられた記念碑に「われらの父木村熊二と小諸義塾の記念に　島崎藤村」と碑文を刻んでいる。木村熊二は、一九二七年（昭和二）八二歳の高齢で没した。郷里の『出石雑誌』に投稿した熊二の句がある。

小鳥さへかげかくしけり雪の山

二三輪春のたよりか梅の花

一九七八年（昭和五三）には木村熊二没後五〇年記念に作曲された熊二の作詩「小諸の春」

〃胸に煙のたえまなき
浅間の山は霞して
裾野は春となりにけり（以下略）〃

が小諸市民会館で発表された。

巌本善治　善治は、一八六三年（文久三）六月一五日に出石藩士井上藤平（一八四一年〔天保一二〕四月二日生まれ）と妻かね（一八四二年六月三日生まれ）の二男として生まれた。兄弟は、長男藤太郎、三男文三、長女いく、二女かめの五人であった。善治は、五歳のとき播州福本（鳥取藩池田家の支封で現在は兵庫県神崎町）の老職巌本範治（号琴城）の養子となった（善治の長男巌本荘民が「善治は出石小学校〔後の弘道小学校〕で国語・習字を教えたのち上京した」と言っていることから、一八七六年〔明治九〕に上京する一三歳までは出石で育ったと推測される）。

生家は、一八七二年（明治五）の戸籍簿によると出石八木町三番屋敷（一八七七年〔明治一〇〕改正戸籍で二番屋敷に変更）借地居住、士族商とある。これは廃藩後のものであり、旧藩時代の八木町は純然たる町人町であったので、その当時善治の生まれた家は三番屋敷の隣りの路地を南に入った出石城三の丸内濠（うちぼり）に面した北岸にあったと思われる（第一巻付図「文化七年出石城下町絵

写真 148　巌本善治

図」参照）。しかし、一八七六年（明治九）の出石町大火で城下のほとんどが焼失したため生家は現存しない。井上家は幕末ごろの記録では一四石三人扶持とあり、仙石氏の世臣であった。歴代のうち四代の井上藤兵衛（一七〇八年〔宝永五〕～一七七六年〔安永五〕）は長隣と号して国文と和歌に秀で、また五代藤兵衛の次男謙蔵（号静軒、一七九四年〔寛政六〕～一八五三年〔嘉永六〕）は頼春水・杏坪兄弟に従学して頼山陽とも交流があり、藩校弘道館の教授に任ぜられたほか私塾も開いた漢学者である。その弟子には、勤皇家で知られる田中河内介や高橋甲太郎らがある。

善治は、一八七六年（明治九）一三歳のとき上京して中村正直（号敬宇）の小石川同人社で英国系自由主義を学び、次いで津田仙（津田梅子の父で農学者）の学農社農学校で米国系実利主義を学んだ。また、津田の影響を受けてキリスト教信者となった彼は、同校卒業後に津田の仕事を助けて『農学雑誌』の編集助手となり、欧米の農学や農業事情の紹介と国内農業問題、ことに小作制度の改善を論じた。この雑誌編集の経験が後の女学雑誌の刊行に生かされることとなる。

一八八五年（明治一八）には同郷のよしみで木村熊二と鐙子が開いた明治女学校の教頭に登用された。若冠二二歳のときであった。翌年に取締の木村鐙子が病没して後は、木村熊二に代わって校長に就任し特色ある教育で当時の世評を高めていった。これは、星野天知・島崎藤村・北村透谷・戸川秋骨らの当時では新進の文士を教授陣に持ったことと、善治がキリスト教主義と儒学を折衷した清新な教育理念により運営したことが当時の社会に適応したからである。教育内容は、情操教育と道徳教育に中心を置き、封建的隷属から女性を解放して地位の向上と権利の伸張を図ると共に幸福を得ることを目ざし、文学と人生を結んで人間愛を究

THE
WOMAN'S MAGAZINE.
明治二十一年三月八日印刷
明治二十一年三月十日出版
女學雜誌
第百號
東京　女學雜誌社

写真 149 『女学雑誌』
（岡本久彦氏提供）

明した。

また、この明治女学校の教育と合わせ高く評価されるものに『女学雑誌』がある。それは、一八八五年（明治一八）の創刊で一九〇四年（明治三七）の日露戦争勃発時まで続刊された。毎月二回の刊行で五二六号にも及び、明治を代表する最大の女性誌としてその啓蒙に大いに尽くした。内容は、欧米婦人の状態・婦人運動の紹介・衣食住の生活改善・婦人の教育・職業・婚姻制度・廃娼など幅広く取り上げて婦人地位の向上を期している。この女学雑誌の思潮も明治女学校と同様で、浪漫主義とキリスト教主義の折衷的立場をとった。特筆すべきは、女学雑誌を母体として育った若手文士らが一八九三年（明治二六）に『文学界』を創刊し、島崎藤村や北村透谷ら明治文壇の雄が巣立ち、これによって浪漫主義文学の花が開いたことである。

しかし、このような自由主義的動向も明治中期以降日清・日露の戦争を契機として、思想や教育の面でも国粋主義が台頭し支配体制がしだいに強化されるなかで、抑圧されていくことになる。また、一方では先の傾向下で公立学校が整備拡充されるのにともない、一般に私立学校の経営は困難となり、明治女学校もしだいに衰運に向かった。それに加えて一八九六年（明治二九）には校舎が全焼したうえ、善治の妻嘉志子（若松賤子の筆名で翻訳文学などに活躍し「小公子」・「忘れ形見」などの作品で知られる）の死が重なるなど不運に見舞われ、一九〇二年（明治四二）に至って名門明治女学校は廃校された。

善治の後の半生は不遇であったともいえるが、常に自己利益を求めるのではなく、人を救い人生をよくすることを理想とした人であった。彼は、この経世済民の志を貫こうとして多面にわたる努力を続けたロマンチックな教育事業家であったともいえよう（一九四三年〔昭和一八〕八一歳の高齢で逝去した）。また、妻の若松賤子は善治の文学論を実践的にたすけた人であり、抒情的で倫理的な作風（前記した著作など）をとおして明治二〇年代女流文学の興隆期を生み出した一人であった（バイオリニストの巌本真理は善治の孫に当たる）。

善治は、終生にわたって出石とのつながりが深く、木村熊二との関係については先述したので省略するが、熊二の兄桜井勉や桜井家との関係もみられる。桜井勉の父桜井石門と前記した善治の叔父井上静軒は同時代に藩校弘道館に勤めた儒者で、共に私塾も開いていた昵懇の間柄であった。善治が校長を務めた明治女学校は桜井勉の旧邸を利用して始められたことや、彼の手で編集された女学雑誌二〇九号には「桜井夫人の葬式」の詳細記事が掲載されていること、更には一九三〇年（昭和五）の『児山櫻井勉翁米壽賀集』の編纂発起人にも善治の名が認められるなど終生の交流があったものと思われる。次に勝海舟とのつながりは、善治が勝海舟に私淑して「海舟餘波」を公刊したり、主宰する女学雑誌に「続海舟餘波」・「海舟先生高談」など二〇数回も執筆していることからうかがい知れる。この海舟と善治を出会わせたのは木村熊二と鐙子であった。また、東京帝国大学総長の加藤弘之も明治二〇年代を中心に一八回も女学雑誌に執筆しており、芸術の項で後述する洋画家松井昇も一時期明治女学校で教鞭をとっているほか、出石出身の乗竹孝太郎（東京経済雑誌社々長）や湯谷磋一郎も善治をたすけている。このように、故郷を離れて中央へ進出した出石人の絆の強さが多分に認められる。

田中　壌

北海道林業の先覚者で日本植物帯調査で知られる田中壌（旧名直吉）は、一八五八年（安政五）七月二八日出石松枝町一一八番屋敷で出石藩士田中盛義の三男として生まれた。字を子歌といい、豹山仙史とも号した。幕末の動乱期を出石に過ごし、明治維新を迎えたのは一一歳のときであったが、六歳のときに母を失い一八七二年（明治五）一五歳で父とも死別した。当時は、旧武士階級が失職して転向を余儀なくされた時代で、一部の者は維新政府の役人などになったが、その多くは職に就けず志あるものは活路を中央に求めて上京した。

写真 150　田中壌（東京都長池敏弘氏提供）

両親を失った田中は、一八七三年（明治六）三月に青雲の志を抱いて上京し、円山四条派の巨匠川端玉章（一八四二年〔天保一三〕～一九一三年〔大正二〕）の学僕となった。一八七五年、当時国立第一銀行副支配人の要職にあった従兄の近藤軌四郎宅に移り住み、川端玉章の洋画の師であり、我が国洋画の創始者といわれた高橋由一（一八二八年〔文政一一〕～一八九四年〔明治二七〕）の私塾天絵楼に移って洋画を学び助教兼幹事を務めた。従兄の軌四郎は近藤家の養子で、近藤家は桜井勉の三弟熊三が養子となっていたが継子がなく、桜井勉が懇請して養子に迎えた人物である。彼は、都築小次兵衛の三男で厚斎と号し三井八郎右衛門高福の侍医であったが、三井組を代表して国立第一銀行の副支配人兼録事となり総監役の渋沢栄一をたすけた人である。ここにも出石の人脈が認められる。

高橋由一は、日本洋画史を飾る最初の名作「鮭」で知られる洋画家で、幕府蕃書調所画学局の画学世話心得から開成所画局出役介に任ぜられ洋風画の研究をするほか、日本橋浜町一丁目の自宅わきに画塾「天絵楼」を開設して子弟の教育を行なっていた。当時、内務省では、仏国パリ万国博覧会に出品するために「大日本樹木誌略」の編集を行なうことになり、桜井地理局長は一八七七年（明治一〇）一月、地理局山林課御雇となった田中に図板作成を命じ、同僚の早川忠直・吉田信孝らと共にその写生を担当した。翌一八七八年二月引き続いて内藤誠と共に第二輯の作成に当たったが、その後一九一〇年（明治四三）に至って白沢保美によって『日本森林樹木図譜』二巻の大著となって完成した（長池敏弘著「田中壌の生涯とその事蹟」・『林業経済』）。田中が地理局に勤めてこの仕事に就いたのは高橋の天絵楼で洋画を研修していたことから、当時は洋画の精密描写の技術が高く評価された時代であり、写真にかわる必須のものとされていたため図譜製作に迎えられたのであろう。

この日本樹木誌の編集に参画したことがその後の田中をして林学に向かわせる動機となったが、病弱さ故に選んだ画の道と同じく、踏査を必要とする林学が健康管理の面からも適したものであったろうことは想像に難くない。田中は、一八七九年（明治一二）四月、大日本植物帯調査に従事するため第一大林区巡回を命ぜられた。前記したように桜井勉は、一八七七年に地理局長に任ぜられ、一八七九年五月より山林局長の職にあったことから、桜井と近藤軌四郎・田中壌の関係と地理局奉職の経緯からみてその後の庇護が察せられる。この調査は高島得三と田中壌の担当で行なわれ一八八五年（明治一八）四月までの六年間にも及ぶ大事業となった。

現今とは異なり交通機関が未発達の時代における全国調査であったが、田中の調査範囲は本州・四国・九

州の諸山に及び、その足跡を印さなかったところは稀だという。当時のようすを田中は「実に瀕死の境を往来せしこと幾回なるを知らず」と伝えている。一八八五年（明治一八）一月に調査を完了し、結果をまとめて発表したのが内務省山林局から出版された『大日本植物帯調査報告』の初版本である。翌年には農商務省が招いたドイツの林学者ハインリッヒ・マイル博士を案内して約八か月間全国の森林を歩いたさいに、マイルから林学上の助言を得、更に推敲補筆して『校正大日本植物帯調査報告』を出して『大日本植物帯調査報告』を改訂している。この調査報告中、とくに注目しなければならないことは森林生成の順序について「樹類偏倚」及び「樹種ノ変換」の項を起こして記述していることである。田中は多くの実例を掲げて各帯における主要樹種が長い時間の経過と共に交替変移して終極相に到達することを説明し、後年のいわゆる「植生変移」の学説に先鞭をつけた。これは、イギリスの植物生態学者クレメンツ・EF（一八七四年（明治七）～一九四五年（昭和二〇））の植生連続の理論と同じものであり、クレメンツ説に先立つ一五年前に我が国において独自に完成されたまさに世界に誇るべき業績であった。

その後、山形県や仙台大林区署を経て一八九三年（明治二六）、北海道庁技師に転出し、林務課長に任ぜられ林務行政に専念する。なお、田中の北海道在任中最大の重要問題は、北海道御料林下渡問題であった。

一八九七年（明治三〇）九月、北海道長官が安場保和に更迭されると突然に田中は非職を命ぜられた。これは、明治政府が薩・長などの藩閥による政治の流れを有していたことに起因するもので、北海道庁の開拓行政においても例外ではなかった。田中は一八九八年一月に本官を辞任し、北海道森林事業の振興を図るため直ちに北海道造林合資会社設立旨意書を公表した。在地の著名人や資産家の多くが田中の志に賛同して、同

年一〇月には「北海道造林合資会社」が札幌郡下手稲村字軽川に設立され、田中はその技師長兼支配人となった。また、田中はこの事業に没頭するため本籍地を出石から札幌区北四条西七丁目三番地に移した。

会社は、国有未開地処分法第三条の植樹目的で四二〇〇町歩の土地貸し付けを受けカラマツによる造林事業を開始した。その後この事業は軌道にのり田中の学識を慕って来る者も多く、軽川の光風館は北海道造林のメッカの観を呈したという。そのほか一九〇二年（明治三五）の社団法人北海道林業会の設立にも貢献するところが大きかった。このように北海道林業の発展に献身した田中は、このころ病におかされて房州に転地保養をしていたが、一九〇三年七月に四七歳の若さで、その生涯を終わった。

桜井恒次郎

一八七二年（明治五）三月一七日桜井勉の長男として出石伊木町に生まれ、弘道小学校を経て東京帝国大学医科大学を一九〇〇年（明治三三）一二月に卒業した。翌年三月から医科大学解剖学教室勤務となり、一九〇二年八月には解剖学研究のため命ぜられてドイツに三年間留学した。帰朝後の一九〇六年（明治三九）五月から京都帝国大学医科大学の教授となって解剖学第二講座を担当し、同年一〇月医学博士の学位を受けた。

写真 151　桜井恒次郎

一九一一年（明治四四）四月には九州帝国大学医科大学の教授に転任し、一九一四年（大正三）から一九一八年（大正七）の間に東京・京都・大阪・名古屋・岡山・佐賀・久留米・神奈川・長崎・群馬・鳥取などに学術調査のため出張し、当時合理的体操

（学校体育）の先駆者として学界にその名声を馳せた。

また、彼が一九一九年以降数回にわたって母校である弘道小学校を訪問し、体育教育の指導を行なうことによって弘道小学校の体育教育を県下に知らしめたことは前にも述べたとおりである。一九二三年（大正一二）七月から翌年四月まで学術研究のため欧米各国に出張を命ぜられ、一九二七年（昭和二）には勲二等瑞宝章を授与された。一九二八年八月二九日五七歳で没した。